《特別講演》

森の文化・山の文化

高田　宏

どうも今日は。論文を一本も書いたことがない，日本フランス文学会会員であり，京大フランス文学研究会の会員でもある僕ですが，それでも今日は仏文の会ですから，頭にちょっとだけ仏文らしいことをお話しようと思います。ご専門の方がおられるとちょっとぼろが出ますけど，あのヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』を僕は翻訳でですが，七回か八回読んだことがあるんです。少年時代に，新潮社の世界文学全集のなかに『レ・ミゼラブル』は三巻本で入ってましたが，これを数回読んでますし，大人になってから，と言いましても五十過ぎてからですが，二回，完読しております。それで，すごい小説だな，とつくづく思ってるんですね。子供の頃にこんな退屈な部分が長いのをどうして読んだのか，今考えると不思議ですけど。というのは，『レ・ミゼラブル』は，よく短くしたのがありますよね。あれは簡単に短くできる小説で，一章まるごとすぽんすぽんと落としていけるんです。例えば，ジャン・ヴァルジャンがジャヴェル刑事に追われて，コゼットをおんぶして夜のパリの町を逃げ廻るところがありますけど，袋小路に追い詰められて絶対絶命，さあどうなるかって時に怪力を発揮して壁をよじ登って中に逃げ込むんですね。それが確か，プチ・ピクピュス女子修道院です。それから修道院の塀の中に転がりこんだ二人がどうなるかなって思うと，その後しばらくジャン・ヴァルジャンもコゼットも出てこないんです。次の章では，そのプチ・ピクピュス女子修道院の歴史が延々と語られてます。で，これが実に面白いんですね。そこにやってくる女性達は，何とか伯爵夫人とか，恋に敗れた女性とか色々いるんですけど，彼女たちの修道院での生活と信仰の様子がまるごと一章分，しかも相当長い章に描かれているんです。それで一章終わったから，やっとジャン・ヴァルジャンもコゼットも又戻ってきて，話の筋が始まるかな，と思うとまだなんですね。次の章は，今度は修道院なるものについてのユゴーさんの大論文なんです。つまり，一般的な修道院についてです。修道院というものの持っているプラスの面とマイナスの面，これはキリスト教の修道院だけじゃなくって，世界における様々な宗教の修道院に当たるものについての考察が，又一章あるんですね。その二章を経て漸く，さて塀の中に転がりこんだジャン・ヴァルジャンとコゼットは，というところに話が戻ってくるんです。ですから，そういう章は一杯ありますから，それを全部すとんすとんと落とせば半分位には，すぐなるんです。第一あの，第一章からしていらないんです。ミリエル神父という，あのジャン・ヴァルジャンが泊めてもらって盗みを働いた家の神父さんがいますが，そ

のミリエル神父の生涯について語られるんです。これがまた見事な中編小説なんです。ユゴーの持っている理想主義，あの人は大変な理想主義者だと思いますが，つまり政治家でもあって，政治のどろどろした裏の世界を一杯見た人ですね。そして政治亡命したような人ですけども。その上で尚且つ，しかも六十歳にもなって——僕も去年ちょうど六十になりましたが——，そんな歳のユゴーが尚且つ，二十歳の青年のように理想を語って止まない人だったんですね。単にお目出度い人じゃなくって，非常に難しい政治の世界を経験した上での理想主義なんです。そういう人だから，この小説の冒頭にあるミリエル神父の伝記のようなものは，いわばユゴーの理想を造形したって言う，相当長い章になるんです。それが終わってからようやくジャン・ヴァルジャンが，どこかをうろうろ歩いているところになって始まるわけです。まあそういう風に，『レ・ミゼラブル』っていうのは実は本筋から離れた余談の森なんです。ほとんど半分はそういうところで，そこが実に面白い。歳を取ってから読みますともう，こんなに面白い小説は滅多にあるもんじゃないと。そういう凄味があって，また読み返したい作品です。

その中に実は，強烈な章で『巨獣のはらわた』というのがあります。ジャン・ヴァルジャンが気絶したマリウスを背負ってパリの地下水道に逃げ込むんですね。これも逃げ込んだと思って，やれやれなんとかなったかなって思うと，ジャン・ヴァルジャンもマリウスも一回消えるんです。そして，『巨獣のはらわた』っていう，パリの下水道の歴史，そして下水道の持っている意味合いって言いますか，それが一つの長いエッセーとして語られているんです。これが面白いんですね。大人になってからここを読んで，ユゴーって人はこんな事を考えてたのかと，本当にびっくりさせられたんです。というのは，パリの下水道ってものについて強烈な批判をしているんですね。そこのところをちょっと一部分だけ読みますが，これは第五部の第二章で，佐藤朔の訳です。

「パリは，年に二千五百万フランの金を水に捨てている。これは比喩ではない。どうして，どんな風に？昼も夜もである。何の目的で？何の目的もなしに。どういう考えで？何の考えもなしに。何をするために？何のためでもなく。どんな機関を使って？そのはらわたを使って。はらわたとは何か？パリの下水道である。二千五百万というのも，専門の学者が見積もった概算の内で，もっとも内輪な数字である。科学は長い探究の末今日では肥料の内でもっとも養分の多い，もっとも有効なのは，人肥であると識った。恥ずかしいことだが，支那人は我々より先にそれを識っていた。エッケベルクの言うところによると，支那の百姓は町に出ると必ず，我々が汚物と呼ぶものを一杯入れた二つの桶を竹竿の両端に下げて，担いで帰るそうだ。人肥のお陰で支那の土地は，今でもアブラハムの時代と同じくらい若々しい。支那の小麦は，一粒が百二十粒もの収穫をもたらす。肥料性の上でどんなゴアノも，生きた都市の排泄物にはかなわない。大都市は盗賊鷗の内でももっとも強力である。田野の肥料に都市を使えばきっとうまく行くだろう。我々の黄金が糞尿だとすれば，逆に我々の糞尿は黄金である。この肥料の黄金を人はどうしているか？深淵にはき捨てているのである」——「我々の黄金が糞尿だとすれば，逆に我々の糞尿は黄金である」

なんてところは，山田稔さんがお喜びになるところだと思うんですが……。(笑)で，延々と先もあるんですが，かつてローマという都市が下水道を作って，それでローマの農民の福利をすっかり吸い尽くしたという事を化学者のディリッヒなんかが言っているっていうんですね。そういう事が分かっているのに，パリは愚かな手本に見習って下賤な偉大さを実現している，というような事を書いて，そしてこう言ってます。「モデル都市パリ，各国民が真似ようとする，よくできた首都の典型であり，理想の首府であり，独創と推進と試みの荘厳な祖国であり，精神の中心地であり，一国を為す都市であり，未来を含む蜜房であり，バビロンとコリントゥスの素晴らしい合成であるパリが，今指摘した見地からすれば福建省の百姓に肩をすくめさせるであろう」それから，「パリの下水道は市が血液のなかに持っている毒である」と決めつけてます。これは今のサイエンスの方から見るとまさに正しいんですね。僕は科学はあまり強くもないんですけれども，こういう事なんです。例えば「都市は森を育てる」って言います。今の科学者の，物質循環に関する研究を見ますと。つまり，京都なり東京なり，大都市ですね，大都市があるとそこに人が一杯いて，まあうんこなりおしっこなりする訳ですよね。それは何処か余所からやってきた米なり野菜なり一杯食べて，それの余り滓を排泄している。そしてその糞尿を，かつての京都でも江戸でもそうですが，近辺の農村の人たちがやってきて，肥えおけに担いで持っていって，畑にこぼしていた訳ですね。そうすると大変質の良い肥料が入って，田や畠が良く育つ。そしてそれが育っていくと今度は，更に都市を取り巻く平野部の向こうに山がありますよね，そしてその山の鳥が常に大群でやってきて，麦でも何でも啄ばんでいくんですね。それはある意味で農家の人達に損害を与えるんだけれども，トータルとすると辻褄が合っているというか，それ以上だというんですね。つまり，鳥は今度は山に帰っていき，糞を落とすんです。そうすると山の森林が，つまり森が良く育つんです。都市と，周辺の農耕地とそのまた周辺の森とが物質循環しているんですね。それは嘗て日本の都市もそうだった。曲亭馬琴の『馬琴日記』というのがありますが，あの中に書いてあるのを見ますと，京都では，街角に肥え桶が常設されていたって言うんですね。彼は京都に遊覧にきた時に見て，驚いているんですけども，女性も立ち小便をする。つまり，座ってしまうと地面に吸わせてしまってもったいない，だから伴やなんかを二，三人連れた，かなりお金持ちで上品な女性も，街角の肥え桶のところでひょいと尻をまくってですね，立ったままやっていると。一滴も無駄にせずに。この話しをもしユゴーが知っていたら，『巨獣のはらわた』の章に書いていたでしょうね。これが，京都周辺の農村の大事な肥料になっていたんです。江戸でも決まった農家の人が，決まった家と契約して，便所の汲み取りをしている訳ですね。そしてお礼を春と秋に持ってくるんです。馬琴の家では，春は茄子を五十本，秋は切り干し大根を五十本，そういう契約で便所のものをいわば，売っていたわけです。その大根の出来が悪くて細かったりすると，馬琴という人もけちだったらしくて，ちゃんとしたもの持って来いと，汲取にくる人に対して家人から言わせてたりしてたんですね，そういう話が日記に出てきます。

ですから今日，「森の文化・山の文化」という題を掲げてますけど実は，都市も又，森の文化・山の文化というサイクルの中に入っているんです。だから江戸で言えば，あの武蔵野が実に見事な雑木林を持っていた，それは江戸という大都市が巨大な人口を抱えていたので，良く茂ったんです。

汲取にくるって言うのは，江戸時代とかそんなに昔ではなくって，僕の少年時代にも——僕が育ったのは石川県の小さな町ですけど——近隣のお百姓さんたちが天秤棒で桶を担いで，持っていってました。馬琴の時代と同じように，何かの折りには作物などをお礼にって持ってきてくれました。だからそういう物質循環ということを，ユゴーという人は今から百三十年ほど前，ずいぶん早い時期に，現代の科学者が漸く理論付けたようなことを書いているんですね。そして，パリという都市は駄目都市だ，と非常に怒っているんです。地下に下水道を作るために滅多やたらとお金をかけて，しかもそれがそのまま川に流れこんで川を汚染している，さらにそれが海へ流れこんで海をも汚している，そのような事も書いております。『レ・ミゼラブル』というと，なんだあんな大衆小説と馬鹿にされる方が随分いらっしゃるんではないかとも思うんですが，十九世紀最大のフランス小説かもしれないんですね。

ユゴーの話はその辺にして，これで多少は仏文研究会にいるなってことになったと思うので，日本にいきます。これも皆さん余り読んでいらっしゃらないであろう，島崎藤村の『夜明け前』。僕はこれを二度読んでます，いや二度半なんですね。というのは一番最初まだ二十代くらいの時に読みかけたけれども，何だか辛気臭いなあ，ちっとも話が動かないし，人間の心理描写も余りないし，どうも面白くないって事で，半分まで行かずに止めました。で，十年ほど前にもう一度読み出したら，これはすごい小説だったんです。それからつい最近，去年にもう一度，今度は必要があって読んだんです。筑摩の文庫版日本文学全集の島崎藤村の巻に，『夜明け前』の第二部を入れるので解説とあらすじを書け，と言われて……。それでもう一回読んだんですが，二度読んでやっぱり面白かったですね。何が面白いかって言うと，やはりこの大長編の中にある藤村の怒りと悲しみとですね，これは日本の近代に対する一番鋭い批判だと思います。それは山・森ってものと近代っていうものがどう食い違っていったかという事で，あの小説全体のテーマなんです。第一部の時代は江戸時代，冒頭から「木曽路はすべて山の中である」とあるように，あの小説は山の話，森の話なんですね。そして山の民・森の民がどういう風に生きてきて，それが政治権力によってどう曲げられてきたか，というのが主題なんです。あの中で繰り返しでてくるのは，木曽の山，それはとても豊かな山なんですが，その木曽の山から山村の人々が締め出されていく話です。

まずは古いところから入るんですけど，江戸時代の享保の頃から尾張藩が非常に厳しい森林政策をとりだすんです。それ以前も多少は，ここは鷹の雛を育てるところだから入ってはいけないとか，つまり鷹の雛が育つような奥山はもっとも豊かな原生林ですが，そういうところは囲い込

みしていたわけです，「巣山」と言って。でもそれは山の民にとって痛手ではなかったんです，奥山ですから。そんな奥の方まではそうしょっちゅうは出掛けない。だけど，享保になると，巡見使を尾張藩が繰り返し木曽の山に送るんですね。役人を遣って見回りをさせて，どの辺に良い樹があるかとか調べるわけです。そして樹木のいいところを尾張藩の占有地にして人民の立ち入りを禁止する。「留山」です。更にまた，何度目かの巡見使が，今度は巣山と留山の周りに新しく立ち入り禁止区域を作るんです。それが「鞘山」です。山に鞘をかけるんですね。市川という役人が鞘山をいっぱいつくったそうで，当時の木曽の人々が嘆き節を唄っているんですね，「情けないぞえ市川様は，巣山留山鞘かけた」。山の大半が巣山・留山・鞘山になってしまった。それでもまだ良かったんです，人家に近いところの山は何とか使えた。焼畑農耕をやっていますね，山を焼いては，蕎麦とか粟とか稗とかを蒔いていた。ところが「木曽五木」と言って，伐っちゃいけない樹を決めるんですね，尾張藩が。ヒノキにサワラにアスヒ，ネズコ，コウヤマキという，五種類の針葉樹です。これは建築用材になる，お金になる木ですので，これは一切採っちゃいけない。その五種類の木のどれ一つ伐っても重罪になるわけなんですね。で，「檜一本首一つ」といわれ，実際にそういう事があったそうなんです。首をはねられるんです。常にそうだったわけじゃないですけれど，非常に厳しい，厳罰主義で臨んだわけなんです。で，それも巣山・留山・鞘山の木を伐っちゃいけないと言うのなら分かるんですが，その区域外でも五木を伐っちゃいけない。五木は幼樹・稚樹にいたる迄一切駄目だと，尾張藩は言い出したんですね。そうすると実は，焼畑農耕出来ないんです。樹の種なんて風に乗って飛んできたり，鳥が糞と一緒に落としていったりして，そこら中に出てくるでしょ。だから焼畑をやろうとすると，ヒノキやサワラやネズコの稚樹をいっしょに焼くことになる。すると厳罰でしょ。それでは生活の基盤が全て失われる。村々の庄屋なんかが相談して尾張藩の出張所である代官所に訴えて出たりするんですね。山を焼くときの，十センチかそこ等の小さなヒノキやサワラには目をつぶって戴きたいと，そうしないと我々は生きていくことが出来ないって。訴えの中には，我々は斯く斯く然々こういう風に生活してきているから，藩の言うようにやったんじゃ飢えて死ぬしかないんだと，そして享保以前にはちゃんと山の恵みで皆生きてきたんだという事を，歴史の証拠なんかも並べて訴えをする。そうすると尾張藩の回答は，訴えの中に飢えて死ぬしかない，でもそうする訳には行かないから乞食になるとか，故郷を捨ててどこかへ行くしかないとか書いてある。そしたら返答は，乞食になろうが故郷を捨てて余所へ去こうが勝手にしろってんです。凄いもんですね。だから『夜明け前』の主人公である青山半蔵，彼のモデルは島崎藤村のお父さんの島崎正樹ですけど，半蔵は平田国学の門人の一人ですが，要するに復古に期待するわけです。古に帰る，つまりそれは木曽で言えば享保以前に帰るということです。享保以前の，全ての山が全ての人々のものであった時代，それに帰っていく復古運動というものに大いに期待するんですね。それが明治維新というわけです。御一新がすべてやってくれるということを，本当にもう心の底から願ってそのための小さな動きも

するんですが。そしていよいよ待ちに待った御一新がやってくる。御一新がやってきたら享保以前に戻ると皆信じているんですね。ところが明治政府は尾張藩よりもっとひどかった。木曽谷は，ぎゅっと切れ込んだ谷でしょう，山一つ越えた伊那谷は広々としてますけど，木曽谷はぐーっと谷が切れ込んでいて，農耕地などほとんど無いんです。ようやく山の裾に，家々がちょっとした平地を使って軒を寄せ合って建っている。その家々のすぐ裏まで，軒先まで，明治政府の官有林に編入してしまったんです。だから其処へ入ったら，これまた手が後ろに回るわけです。落葉を採ってきても，要するに国家のものを盗んだって事になるんです。日本の近代っていうのは，科学技術の進歩とか色々なものがありますけど，ひとつの大きな特徴は，山村文化を消していく歴史なんです。『夜明け前』はそのぎりぎりの処で描いていく，近代批判そのものなんですね。非常に力強い近代批判です。

日本の近代というのは，まあ近代が元々そういうものなんだけれども，行くべきでない方向に行くんです。山村文化が，今では本当に細々としかなくなってきている。そしてどんどん潰されています。現在の日本国家が潰しています。日本の国家及び国家の認可を受けた企業ですけどね。今一番激しく行われているのが，ダム建設による山村潰しです。ダムを作るから邪魔だから退けっていうんですね。僕の育った石川県に大聖寺川って川がありますけど，その川の中流辺りが山中温泉です。そして更にその奥を十数キロ行きますと，昔江戸初期に窯場があって，彩色磁器を焼いていた，九谷焼きですね。その九谷村もダム建設のために数年前には人っ子一人いなくなりました。ダムを作るから退けということで，古九谷の歴史を持つ九谷村は消滅しました。ほかにも多くの山村がダムのために潰されています。新潟県の三面川のダムでは，奥三面の山村が全部潰されました。民族映像文化研究所が，その前に「奥三面」っていう記録映画を撮っています。まあそういう風にして山村がどんどんどんどん潰されています。ゴルフ場も凄いです。今約二千のゴルフ場が日本列島にあって，総面積を合計すると東京都の面積を超えているんですね。例えば富士山の裾野には三十幾つのゴルフ場があります。そのゴルフ場によって多少のお金が落ちる面もあるんだけど，むしろ山村の暮らしの文化が破壊されている。山村には共有する文化が生きているのですが，ゴルフ場などが入ってくるとそれとは反対の力が非常に強くなります。ただし残っている山村もないわけじゃない。例えば新潟県と長野県にまたがっている秋山郷というところがあります。あの秋山郷に最初に行ったときは怖かったです。津南の町から村営バスに乗って行くんですが，ずっと谷を上がっていって鳥甲山のぐっと迫ってるところを入っていくころにはもう真っ暗です。バスを降りたら街灯なんかありませんから，たまたま村の男がひとりそこで降りたので，一緒に歩いてくれたんですね。そうでないともう行着けたかどうか分かりません。道聞こうったって誰もいませんし。彼と別れて最後はつり橋渡って，旅館にいく。つり橋の手前は吹雪を防ぐ小屋掛けになっています。つり橋にのりますと板が凍り付いてつるつるしていて，脇の金網がそこら中破れていて，その下には谷川が轟々と流れていて，本当に心細かったけども，

渡らなければ酒も飲めない，と思って頑張って渡ったんですけどね。ま，ともかくそこまで一緒に坂道降りてくれた村の男に，冬はどうしているの，って言ったら，ああ冬は遊ぶさって言うんですね。つまり冬は遊ぶ，というのが山村の暮らし方の非常に大きな特徴です。平地の農耕民というのは，冬も働くんです，大体。僕の母方の親類が我が故郷の町のすぐ近くの在の出ですから，よく分かるんですけども。まあ田植えから刈入れまでもよく働きますけれど，冬は冬で又働くんです。なんというかな，蓄財型，貯蓄型ですね。働くのはいい事だ，って。働かないのは人から後指差される，あいつは怠け者だ，あんな奴に嫁の来手はないとかですね。色々言われるんです。でも，山村は遊ぶんですね。冬場は何もしない，ただ遊んでる。例えば最近では公民館に行って，何とか会議とか尤もらしい名前を付けて酒飲んで，歌って踊って遊んでるんですよ。冬場は遊ぶ，というのは貯蓄型じゃない。私有型・蓄財型は水田稲作平地文化の特徴ですが，山の文化は共有の感覚の上に成り立っています。がつがつしない。冬は遊んで暮らす，半年遊ぶんです。冬というと春夏秋冬の四分の一のようだけど，山では大体半年なんです。ついこの前の三月，信州の佐久の山村の一つで川上村って所に行ったんですが，村役場に行って，村史編纂室というところをちょっと覗いてみたんですよ。すると七十前後のおじさんが四人で，のんびりお茶を呑みながら，村史編纂をやっておられるんですよ。で，古文書全部を自分たちで原稿用紙に書き起こしている。村のあちこちから出てきた文書が壁にずらーっと仕分けしてあって，その四人のおじさんが読みにくい文書の字を読んで，全部四百字詰めの原稿用紙に書き上げて，そして既に分厚い川上村村史資料編三巻，立派なのが出てます。普通村史や町史は大学の先生とか郷土史家とかに頼んでやってもらうでしょう。川上村のおじさん達は古文書の読み方を最初大学の先生に習ったそうです。後は，自力でやっている。いや立派なもんですね，と言って，で，通史は？と聞くと，資料編を全部やらずに通史を書くことはできないよってね。わしらの目の黒いうちには通史はでないって言ってましたね。実にのんびりしているんです。で，僕が感心していたら，いや，この村は半年遊ぶからなって。つまり，あの村史は隠居仕事なんですよ。冬場半年，編纂仕事やってるんです。そこへ来てストーブに当たって，お茶呑んで，古文書を書き起こして，時々僕みたいな変なのがやってきたら好い鴨ですからね，話し込んでお煎餅かじって。遊びながら村史が出来ているんですね。で夏場は七十だろうが八十だろうが足腰立つならば，もう朝の三時から高原野菜の出荷で目の回る忙しさ。学生アルバイト延べ何万人と雇う村ですからね。だから夏場は村史なんかやっておられない。でも冬になったら，若い人も年寄も他の仕事はしないんですね，皆遊んでいる。冬場に稼ぐのは，スケートのインストラクターぐらいだって言ってましたね。インストラクターで東京ぐらいまで行くんですって。そうするとスケート場で嫁さん，拾ってくるって。(笑)だから若い夫婦が多くて，子供が沢山いて，村長が今年は小学校も中学校も増築しなきゃ，と言ってました。ついでに言っときますと，その村では県や国から一切お金を貰わないで，村のお金だけで大文化会館を今年着工するんだそうです。中心になるのが，二十四時間オープン図書館。つま

り夏場は忙しいから，図書館にいこうと思っても夜おそくでは閉まっているでしょう。それじゃ図書館の意味が無い，二十四時間開いている図書館を造ろうと。あわせて野菜博物館，野菜情報センターを造って，それからハイヴィジョンシアターを造って，演劇ホールを造って，そういう風のを造るんだそうです。それはみな主に，半年遊ぶための施設なんですよ。

山の民は皆そうなんですね。もっと色々例を挙げようと思っていたんですが，時間がもう無くなっているみたいですね。……半年遊ぶのは山の民と，そして海の民がそう。今の船乗りは必ずしもそうじゃないんですが，江戸時代から明治時代にかけて，これも僕が育った石川県の方なんですが，北前船の根拠地の村が沢山あって，その北前船の船乗り達は，半年働いて半年遊ぶんです。つまり大坂から春の彼岸過ぎに船出をして，瀬戸内海の西から関門海峡を抜けて北海道へ行って，北海道から秋の彼岸頃に又大阪に戻ってきて，そして舟囲いして，財布を一杯に膨らませて故郷に向かって帰るんです。帰ると，我が町の近くの村の船乗り達ですと女房子供とか若妻とか連れて山中温泉辺りに行くんですね。湯治にいって二週間三週間と，まあその間にちょっと嫁さんの目を盗んで遊女と遊んだりもするんでしょうけれども，いやいや出先で結構やっていますからね，多分山中温泉の時は女房孝行していると思いますが，とにかく温泉でのんきに遊ぶ。だから山中節の一節にあるんですね，「山が赤うなる，木の葉が落ちる，やがて船頭さんがござるやら」つまり紅葉落葉の時期になると船頭衆が家族を連れて湯治にやってくる，それを山中温泉場の人々が待ち望んでいるわけです。そうやって湯治して自宅にもどると正月が近い。船乗り達は船主，つまり船のオーナーの家へ行って煤払いしたり餅つきやったりして，正月を迎え，雪のあいだは炬燵に当たって餅を食ったりして，その間に子種が宿ったりして，また春になると峠を越えて大坂に向かっていくんですね。というサイクルで，半年働いて半年遊ぶというのは人間の暮らしにとって非常にいいんじゃないかと思います。僕もそうしたいけれど，まだそうできていない。ましてやサラリーマンはそんなこと出来ませんよね。ある日部長の所にいって，「あの，そろそろ雪が降ってきて冬になったので半年ばかりお休みします」（笑）なんて言ったら，「お前何寝呆けてるんだ」と言われるでしょうね。雨にも雪にも負けず，春夏秋冬，季節にかかわりなく働き続けるというのが「近代」なんですね。そして山の文化・海の文化は，近代とは馴染まないんです。季節とも気候とも無関係に，雨が降ろうと槍が降ろうと会社に行って八時間ちゃんと働く，というのが我々の近代市民社会なんです。だから山の文化・海の文化は次第に細っていくしかなかった。そういうことだと思います。

縄文人の話や南方熊楠の話もしたかったけれど，それぞれ後一時間ずつぐらいかかりそうなので，今日はもう時間だから諦めます。そうだ，それでもう一つ，笑われるかもしれませんが，仏文出身である証明をさせて戴こうと思っています。前世紀末のフランスのガラス工芸家で，エミール・ガレという人がいます。そのガレのデザインも，あれは反近代なんですね。つまり一つ一つ手作りをしていくという思想です。大量生産をしない，同じものは作らない。それを生活の中

に持ち込もうとしたわけです。産業革命から百年ぐらい経って，いろんな所での行き詰まりが見えてきていた。そういうところで一つの運動として，ガレ達のやった運動というのがあるわけです。ガレはアトリエの玄関に板を打ちつけて，この言葉を書いていたそうです。

「MA RACINE EST AU FOND DES BOIS」私の根っこは森の奥にある。つまりガレにとっても結局，産業革命以来の近代というものが非常に息苦しいものになっていた。それに対する巻返しというと変ですが，アンチとして持ち出すのはやっぱり森だったんですね。だから彼のデザインも，森の中に草が茂っていてそこに蜻蛉がいたりとか，蟷螂がいたりとか，そういうのが多いですね。あれは皆森の表現を，デザイン化しているんです。

それからもうひとつ。フランスのガレは，そう言ったんですが，もう一人最近の詩人で，どういう人かあまり良くは知りませんが，北陸の方の詩人で谷かずえさんという方がいらっしゃって，詩集を贈って下さったのを見ていましたら，一行大変気に入ったのがあったんですね。「森は巨大な地蔵様だった」。ガレの言葉も好きなんですが，こちらの言葉は何か日本って感じがしますね。森の中に全て預けられる，抱きかかえてもらえる，森によって現世を超えていく事も可能だ，という。「地蔵様だった」で表される森の優しさ。森，というのは怖いものでもあるんですが，大きく言えば人々を生かしていた。先程の木曽の人々も正に森あってこそ生きてきたんですね。

ちょっとまとまりの悪い話になったけれども，これで終わらせて戴きます。ありがとうございました。